
魔王物語

琉音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王物語

【Nコード】

N3966C

【作者名】

琉音

【あらすじ】

普通の中学校に通う少女・美天はなにか特別な能力があるとか、特別頭がいいというわけではない、いたって平凡な少女だ。ある日、音楽の授業で『シューベルト魔王』のビデオを観ながら勉強していたが、美天は寝ていてみていない。授業終了後、友達に起こされ、皆が教室を出て行った後、美天も教室を出ようとしたが、そこで現代ではありえない格好をした男が現れて・・・？

「第1話『出会い』」

「魔

王物語」第1話『出会い』」

―夜風をついて

―馬で走るのはだれだろう

―父親がわが子をしっかり

―やさしく抱いている

父「坊や 何が怖いのか」

えないのか」

子「そこに魔王が…お父さん 見

父「あれは夜霧だよ」

魔王「坊や おいで たのしく遊ぼう
川岸に花がいっぱい咲き 金

色の服もあるよ」

子「お父さん お父さん 魔王の
声が聞こえないのか」

めく音だ」

『父』 「安心しなさい 枯れ木のざわ

お遊び

『魔王』 「さ おいで うちの娘たちと

寝かせてくれるよ」

夜のロンドを踊って 坊やを

の娘が」

『子』 「お父さん それ そこに魔王

だよ」

『父』 「坊や あれは 枯れた柳の影

ていくぞ」

『魔王』 「かわいい子 力ずくでも連れ

まえる」

『子』 「お父さん 魔王がぼくをつか

―ぞつとして 馬をいそがせ

―父はあえぐ子を抱きしめ

―やっとわが家に着くと

―子は息たえていた

「……………はい、今日の授業はここまでにします。日直さん、お願いします」

「きょうつけ、これで6時間目の授業を終わります」

「……………終わります」……………

みんな教科書やら縦笛やら持ち、教室からでていった。…ある一人を除いては。

「美天！！美天！！起きてってば！！」

友達の春樹が寝ている美天をゆすつた。実は、さっきのビデオ、シユーベルトの『魔王』をみていた時も

寝ていたのだ。

「みーあーまー！！起ーきーろー！！」

ユサユサ

「おーい、起きろー」

ユサユサ

「……………いいかげん起きろー！！」

ユサユサユサユサユサユサユサユサ

「……………ん？何さ春樹……」

やっと美天は起きた。春樹は半分呆れていた。

「美天さん…今何時かわかる？ちなみに今日は45分授業だから」

美天たちの学校は45分授業、50分授業と種類が2つあった。

「……………午後の3時30分……………」

「もう授業はとつくの前に終わってるんですけど」

「……………」

そのまま美天は固まってしまった。

「……………あたしは先にいつてるからちゃんと教科書もってから教室にいきなよね」

「……………うん」

そして、春樹は「早くこいよ」といった後、教室を出て行った。

「はぁ…また寝ちゃったなぁ…昨日夜更かしなんかしなければ良かった…」

教科書を持ち、教室を出ようと椅子からたちあがった時、

————ガシャン

「うわ!?!」

何かが落ちた音がした。美天は恐る恐る後ろをみていた。すると、そこにはビデオが落ちていた。

「あちゃーもしかして落としちゃったのかな…壊れてないよね？」

ビデオが割れてないか見てみたが、どうやら以上は無いみたいだった。

「ってかこれ何のビデオなんだろ……『シューベルト…魔王』？
なんじゃこれ…」

黒板ではなく、いつも先生が使っているホワイトボードに『魔王』
とかいてあった。おそらく今日は

これを勉強したのだろう。

「…うわ…どうしよ…なんかこれ面白そうなのにな…ちょっと見たかったかも…でもまあいいか。
また今度多分見るだろうし」

そういつてビデオをテレビの上に置き、教室を出ようとドアに手をかけた時だった。

「……………待て」

後ろで低いテノールの声がした。美天はバツと後ろをみた。するとそこには黒なのか紫なのかわからない、

足までとどく髪をし、目は猫型の目で金色。変な長い黒マントをか

ぶつた一人の男が立っていた。

「……………ダレですか」

「我の名は魔王。暗黒の世界の王だ。貴様は誰だ」

「はあ！？何が魔王ですか。何が世界の王ですか。頭大丈夫ですか。つてか初対面なのにいきなり『貴様』
あつかいかよ！！」

……………とつっこもうとしたけどやめた美天はとりあえず名前だけ名乗った。といた。

「……………美天です」

「ミアマか。それで聞くが、貴様はキリストの子だな？」

「キリスト？……………ああ、イエス・キリストか……………違いますよ」

「なんだこの人」と内心思いながら美天は答えた。

「嘘をつくな。貴様はキリストの子だろう」

「…そんな…あたしは神様の子供じゃありません。人間です」

美天がそういうと『魔王』と名乗る男は深いため息をついた。

「下界の生き物はこんなにも馬鹿なのか。神の子供も人間も同じだろっ」

「……………」

さすがにむかついた美天はちょっと震えていた。

「ところでミアマ。貴様、我の国にきてみないか」

「……とかいって変なところにつれていく気なんですよ。嫌ですよ」

「……………我の言葉が信じられぬか？」

「うん。ってか魔王ってことも信じてないし」

「……………ほほう。では信じさせてやろうか？」

その魔王と名乗る男は一つ怪しい笑みを見せてから、美天のほうに腕をのばした。

「……………何する気？」

「力づくでも貴様を連れて行こうとしているだけだ」

そういつてその男が手をしたに下げると美天の体は足から順に消えていった。

「な！？何これ！！ちょっとやめてよ！！」

「暴れるな。害はない。あとほんの数秒ですべて消える」

「やだよ消えるなんて！！いや……」

そついいながら暴れているが、もう胸のあたりまで見えかかっている。

「やだ…春樹!! 助け…」

最後をいい終わる前に美天は消えてしまった。…視界が一気に暗くなった。

「……………新しい奴隷が増えた…」

そつ笑いながらつぶやくとその男も消え、教室には誰もいなくなつた。

その数分後、いつまでたつてもこない美天の様子をみにきた春樹だが、そこには美天の姿はなく、

入り口のすぐ近くで雑に落ちていた教科書、縦笛、筆箱。そして美天の片方の靴だけだった。

く第1話『出会い』く（後書き）

この物語を読んでもいただきありがとうございます!!

初めての作品なので上手くかけているかわからないのですが、とりあえず連載系、1話が終了しました!!

これから2話、3話など書き続けていきますので応援よろしく願います!!

～第2話『教室から城へ』～

魔王物語～第2話『教室から城へ』～

「……………」

「……………おい」

「……………」

「……………おい、ミアマ」

「……………」

「おい、聞いているのか貴様」

「聞いてない」

「……………」

2人は音楽室から魔界に行き、魔王と名乗る男が呼んだ馬車に乗っていた。

ガタガタ音になる中、美天は何も話さなかった。まだ、さきほどのことを信じたくないのだ。

「……………絶対にインチキだ……」

「何か言ったか貴様」

「何にもいってませうん」

「……………」

もはやため息をつく自称魔王であった。

その数分後、ついに美天から言葉が出た。

「……………ねえ魔王」

「……………なんだ」

少し魔王は怒っているようだった。

「さっきから『魔王』でしか言っていないけどさ、本当の名前って何なの？」

「……………なぜ貴様に教えなければならん」

「『魔王』っていいにくいし」

「……………だ」

「は？何、聞こえなかった」

美天はよく聞こえなかったため、魔王に近づいた。

「な――！貴様、なぜそんなに近寄る――！」

「聞こえないからだよ――！嫌だったらさっさと教えな――！」
「……チツ」

「今舌打ちしたよこの人……」
と、心の中で思う美天なのであった。

「……タンだ」

「は？タン？何、牛タン？」

「貴様、牛タンなぞ………サタンだ――！」

「サタン？」

あまりにもそのまんまの名前なので美天は笑ってしまいそうになった。だが、なんとなくサタンからものすごい殺気を感じたので何とかこらえた。

「サタン……ねえ……」

「なんだ貴様、何か不満でもあるのか」

「いや、何でもないよ。サタンさん」

「『サタン』でいい。『さん』をつけられるのはなんか嫌だ」

「……『サンタさん』みたいだから？」

「……………」

美天の発言で、今度こそ本当に黙ってしまったサタンだった。

それから約1時間後、ついにサタンが連れて行きたかった場所についた。サタン家だ。いや、サタンの城と言った方がいいのかもしれない。

だが、その城は馬鹿でかく、門もたっていてその門もとても大きく、教科書にあったはずの『花』だと思わせるものは何もなかった。

「……………やっぱり帰る」

「無駄だ、ここからは私の力がないと出れん」

「……………」

美天はこのとき、本当の絶望を感じたという。

馬車から降り、城の門へ向かうとしたとき、門が『ギギイ…』と気味悪い音をたてて開いた。美天は少し視力が悪いので、何があつたかはわからなかった。だが、サタンの表情が明るくなったのがわかった。

「ねえサタン、あれって…」

「我が娘たち…!」

「娘？」

美天の問いに聞きもせず、サタンは門のところまで走っていった。その闇の太陽に照らされる髪は、あまりにも美しくつい美天はみとれてしまった。

「お父さん！！おかえりなさいませ！！」

遠くから元気な可愛い声が聞こえる。どうやらこの声の持ち主がサタンの娘なのだろう。

門からサタンが「こつちへ来い」と手招きしているのがみえたので美天は歩きだした。だが、美天の歩く速度の遅さに耐え切れなかったのか、サタン人差し指を美天のほうへ向け、その後一氣に自分のほうへとむけた。すると、美天の体は何かに思い切り引っ張られるようにあつという間にサタンたちのもとへついた。

「な！？え！？今勝手に体が…」

「貴様が歩くのが遅いから魔力をつかったただけだ」

「……」

少し美天はショックを受けたとか受けてないとか。

「お父さん、この人だあれ？」

闇のこの世界には似合わない金色の顔をした女の子がサタンのマントの裾を持って言った。

「ああ、こいつの名は『ミアマ』。私の新しい奴隷だ」

「……………はい？」

「だから奴隷だ」

「……………ごめんサタン、あたしがいつ貴方の奴隷になったかわからないんだけど」

「ここに来る前になった。それはおいといて娘たちを紹介しよう」

サタンがそういうと2人の女の子がサタンの後ろから出てきた。1人の女の子は金色のふんわりウェーブで、猫型で綺麗なブルーアイをしていた。もう1人の女の子は紫色のストレートヘアにこれもまた猫型。目の色は血みたいな真っ赤な色だった。

「アリアです！！新しい奴隷さん、よろしくお願いします」

金色の髪の子が丁寧にお辞儀をした。美天も思わずお辞儀してしまった。

「……………エレクトラです」

紫色の髪をした女の子が無愛想にあいさつした。さっきまではその赤い瞳を細めて笑っていたのに、まるで別人だ。

「えっと…美天です…奴隷かなんか知らないけど…とりあえずよそしく願います」

「うむ、あいさつは終わったようだな。ではもう時刻は遅い。2人とも、美天に客室用の部屋を教えてくれ」

2人は「はい」と返事した後、美天の手を握って城の中へ入っていた。美天は少し混乱している。

サタンはそんな3人の様子をみとどけたあと、暗闇の中に消えてしまった。どうやら魔力で城の中に入ったようだ。

「……………ふう〜なんか疲れた〜」

部屋に入った美天はベットに倒れこんだ。あの後、アリアに質問攻めをされた。さすがに疲れている美天は「また明日話そうね」といい、なんとか上手く逃れた。

「……………魔界…か」

——いきなり来ちゃったけど、春樹たち、どうなったんだろう…心配してないかな…お母さんやお父さんにも何にも言っていないし…まさか警察…とかはないか。

そう思いながら美天はいつの間にか寝てしまった。

——これが、美天がはじめて魔界の夜をすごした時だった。

〈第2話『教室から城へ〉（後書き）

はい、魔王物語第2話です。魔王さんの娘たち登場しました！！名前は…想像です。

これから週に1〜2回くらい最新していこうと思いますので、応援よろしくお願いいたしますw

あと、前回の作品にコメントしてくださった鮑心繫様、九条 要様、ありがとうございます！！

〈第3話『二人の娘たち』〉

魔王物語 第3話

「ん……………」

目をつつすらとあけると視界には見慣れない部屋が移っていた。

「…………どこだ？」

とりあえず起きて窓の外をのぞいてみた。

空は見事に晴れていて雲も浮いている。だが、その雲は紫色をしていた。

「……………思い出した…私、たしか音楽室にいて…なんか変なおっサンが現れてそんで変な術かけられて無理やりここにこさせられたんだ…」

「……………誰が変なおっサンだって？」

「！？」

背後から声がしたので恐る恐るみるとそこには後ろに黒いオラが漂っているサタンの姿があった。

「……………お、おはようサタン……………」

「……………おはよう」

「（あつ、ちゃんと返事はしてくれるんだ…）で、何の用？」

「……………朝食だ。ついてこい」

そういうとサタンは部屋を出て行った。

「あっ！！ちよつとまつてよ！！」

美天もいそいでベツトから降り、サタンについていった。

「ギヤ——！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

! ! ! ! ! ! ! ! ! ! !

「五月蠅い騒ぐな」

なぜ美天が叫んだかというと、ちゃんと理由があつた。

「ば、ばけ、ばけ、ばけ、け、け、け、け、け、も、け」

「ちゃんと話せ」

「化け毛けけけけけよよよよよよよよよ」

.....

サタンはゆつくりと手をだし、美天の頭につけ、何かを唱えたあと、ゆつくり手をおろした。

「……ミアマ、貴様化け物や妖怪がきらいなのか？」

「！！（美天、激しく首を縦に振る）」

そう、食堂に入った美天がなぜ叫んだかというところには角がはえていて体が緑色をしたものとか、

耳がものすごくとんがっていて目玉もぎよろつとでているあの『ハ
〇・〇ッター』に出てくる
『ゴ〇リ〇』みたいなものなど、さまざまな人間離れした者たちが
いた。

「（そんなに振んなくてもいいのに…）仕方ないだろう。ここは魔
界なのだから、あんなのくらい此处には
腐るほどいるぞ？」

「（あんたが勝手に連れてきたんじゃん！！）」

心の中で静かに突っ込みをした美天であつた。
とりあえず美天はサタンに指定された席に座つた。周りからはガヤ
ガヤ騒がれていた。

「なんで人間の娘がここに！？」

「どうやって入ってきたのだ！？」

「ここは魔界だぞ…なぜ人間の小娘などが…」

「サタン様と一緒に来たぞ…まさかあの小娘が新しい嫁とでもいう
のか！？」

「馬鹿いうな！！あやつは人間だぞ！？下界の生き物なんぞがサタ
ン様の嫁になれるわけがない！！」

ましてやキリストの子供など…」

「そんなことしてみろ！！あの小娘が嫁になったらそれこそがこの
魔界の終わりだ！！」

「待て、よく考えろ、サタン様には婚約者がいるんだ」

「ああ…隣の国の…」

「たしか名前は…『ロード』という名前だつたぞ…」

「いや、まだわからない。過去に魔界の者と下界の者が結婚し、娘
が生まれたという話を聞いたことがある」

「第一、サタン様の娘・エレクトラ様も…魔界人と下界人の間の者

だ」

「たしか母親は…」

周りがそういつているのを美天は全部聞いていた。

「（なにそれ…婚約者がいる？娘もいるのに？それに、『エレクトラ』って子…たしか昨日に居た子だよ…あの子

が人間と魔界人のハーフ？で、そのエレクトラがサタンの娘ということ…）」

美天がそう考えているとき、サタンが急に立ち上がった。周りは急に静かになる。

「……今、くだらない話をしていたのは誰だ？直ちに立ち上がれ…」

すると、何人かの奴隷が立ち上がり、恐る恐るサタンの近くに來た。

「……貴様らか……」

「も、申し訳ございません！！もう今後一切この様な話はしません！！ですから、どうか命だけは……」

「貴様らの様な下衆に生きている資格などない……」

そういつてサタンはゆつくりと腕をあげ、その奴隷たちにむけた。

「なぜ、貴様らがここで命尽きた理由がしりたければ死後の世界で探すことだな……」

そしてサタンは一言「死ね」といったあと、奴隷たちに光線をはなつた。

あたりはシンと静まった。奴隷たちは顔を固まらせた。

「……何をするミアマ」

そう、美天は立ち上がり、サタンの腕をつかんでいたからだ。いきなりのもので驚いたサタンは方向を

間違え、別のところに光線をあててしまった。壁の一部が粉々になっ

「こ、殺しちゃダメ…その人たちだって生きてるんだから…」

「だが、奴等は貴様のことだけではなく、エレクトラのことも侮辱した!!」

「私は平気!!というより当たり前だよ!!いきなり人間の私が来たんだもん!!誰だって驚くよ」

「だが、エレクトラのことは許せぬ!!」

そういつてまた奴隷たちを殺そうとした。だが…

「「お父様やめて!!」」

食堂の入り口に二人の女の子がたっていた。エレクトラとアリアだ。二人が駆け寄ってきてサタンに抱きついた。

「アリア…エレクトラ…」

さっきまで漂っていた殺気が急に消えた。他の奴隷たちと美天はホッとした。

「お父様…私はなんともない…だから、この人たちを殺さないで…」

エレクトラはサタンのマントに顔をうずめ、震えながら静かに呟いた。アリアは心配そうにエレクトラを見つめた。

「なんでも…ない…から…」

「エレクトラ…」

サタンは呟くとエレクトラの頭をそつと撫でた。

「…気にすることはない。お前は私の娘だ」

そう呟いたサタンの瞳は何よりも優しい瞳をしていた。エレクトラは顔をみあげ、サタンがもう怒ってはいないということを確認すると美天のほうを向いた。

「……………なに？」

「……………」

エレクトラはずいぶん黙った後一言、静かに言った。

「……………お父様を止めてくれて…ありがとう」

そういうと恥ずかしかったのか、エレクトラはまたサタンのマントに顔をうずめた。

それをみた美天はにっこり笑った。アリアもにこにこしている。

「エレクトラ、別にいいんだよ。私には『ありがと』とか言わなくて。だってさ…『友達』じゃん!…」

「いや、ちがう。二人の友達になったことだ」

サタンはそのあと、こう話した。二人はこの魔界の王・サタンの娘だからといってあまり他の魔界の子供が

近づいて来なく、学校の先生まで二人をひいきしていたという。特にエレクトラの差別は酷かったという。

アリアには一く二人の友達はいたんだがエレクトラにはまったく友達がいなかったとか。

「……だから多分、エレクトラは喜んでいると思うぞ」

「……あのさサタン、そんなにあの二人に差別があるなら学校やめさせればいいじゃん。それで城に誰か雇えばいいんじゃない？」

「そうさせようと思ったんだが二人が聞かなくてな、学校をやめたくないというんだ。だから諦めた。私は二人がそれでいいんならそうしようと思ひ、学校を通わせているんだ」

「……………へえ……………!!!!!!」

美天は何かを思いついたようにいきなり止まった。

「どうしたミアマ」

「ねえサタン、お願いがあるの。明日さ、少し城からでていい？どうせ街かなんかあるんでしょ？」

「……お前は一応奴隷なんだぞ？」

「お願い~~~~」

「だいたい何をする気だ？」

美天はニヤつと笑った後、サタンに耳打ちをした。それを聞いたサタンは驚いた。

「馬鹿なこと言うな。そんなことすればまた二人が悲しむだけだ」
「だかさ……」

美天は再びサタンに耳打ちをした。

「……………なるほどな……」

「ね？いい考えでしょ？おねがい……」

「う……む……仕方ない。あの二人が喜ぶなら……」

「やった……！サンキューサタン……！」

「そのかわり、明後日からはどんどん働いてもらっからな」

「えっやだよ」

「じゃあその提案は「やります」……よし」

夕方、アリアとエレクトラが帰ってきたあと、美天はにこにこで二人に元気良く「おかえりなさい」と言った
ものだから二人はものすごく驚いていた。

夕食を食べ、朝殺されかけた奴隷に風呂場を案内してもらい、風呂に入っているとき美天は呟いた。

「うふふふふ……明日が楽しみだ……」

そこを通りかかったサタンに「気色悪い」といわれたが今の美天はそんなことお構いなし。

風呂からあがった美天はアリアとエレクトラに「おやすみ」とすごいにこやか顔でいったあと、サタンに貰った

自室に向かった。

自室に入った後、美天はいそいで奴隷の人たちにもらった紙とインクと羽ペンをとりだし、何かを書いていた。

次の日朝、徹夜をした美天の目の下にはすごいクマができており、サタンに鼻で笑われたとか。

く第3話『二人の娘たち』く（後書き）

ずいぶん遅れての更新です。

続きを待っていた下さった方々、本当に申し訳ありません。今度からはちゃんと計画的に小説を投稿していこうと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3966c/>

魔王物語

2010年10月28日03時45分発行